

第5学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「言葉について考えよう」 教材名「言葉を使い分けよう」

2 単元の目標

語感や言葉の使い方を意識し、言葉が相手との関係を作る働きに気付ける。相手と目的に合う語句を選び、意図が伝わるように文の書き表し方を工夫できる。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①語感や言葉の使い方を意識し、言葉が相手との関係を作る働きに気付いている。（〔知識及び技能〕(1)ア・〔知識及び技能〕(1)オ）	①「書くこと」において、相手と目的に合う語句を選び、意図が伝わるように文の書き表し方を工夫している。（B(1)ウ）	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

同じ内容でも相手や場面によって適した言い方が異なることを確かめ、伝えたい意図に合う語句を選ぶ。丁寧な語に機械的に替えるだけにせず、相手がどう受け取るかを実際の場面で考える。学習指導要領のB(1)ウを中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(1)ア・〔知識及び技能〕(1)オを、言語活動の中で確かめる。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

相手・目的・場面を示した教師作成の例を比べる。言葉を選ぶ理由を、語の難しさではなく受け取り方から説明させる。児童の家庭の言葉や方言を低く評価しない。おおむね満足できる状況は、相手と目的に合う語句を選び、意図が伝わるように文の書き表し方を工夫しているという姿で捉える。語句や本文を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全3時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○相手や場面の異なる例を読み、同じ内容の伝わり方の違いを確かめる。	学習状況を見て支援する。
第2次	2 （本 時）	○相手と目的を決めて文を書き、語句を選んだ理由を話し合う。	思①（発言・学習記録）
第3次	3	○受け取り方を確かめて文を直し、日常で使うときに気を付けることをまとめる。	態①（学習前後の記録・振り返り）



6 本時の指導 (2/3)

(1) 本時の目標

相手と目的に合う語句を選び、意図が伝わるように文の書き表し方を工夫できる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	本時に使う教材・前時までのノートを確認、自分の最初の考えを短く書く。 ○「同じお願いを伝えるなら、この相手にはどの言葉を選びますか。言い方を変えると、受け取り方はどう変わりますか」 【めあて】同じ内容でも相手や場面によって適した言い方が異なることを確かめ、伝えたい意図に合う語句を選ぶ。 〈予想される児童の反応〉 ・親しい友達にかたい言い方をすると距離を感じることもある。	本時に考える対象を確認し、既に確かめたことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「同じお願いを伝えるなら、この相手にはどの言葉を選びますか。言い方を変えると、受け取り方はどう変わりますか」 伝える相手と目的を決め、同じ内容を異なる語句で書き表す。読み手に受け取り方の違いを聞き、伝えたい意図に合う語句を選んで文を書き直す。選んだ言葉の意味や語感と、修正の理由を説明する。 〈予想される児童の反応〉 ・親しい友達にかたい言い方をすると距離を感じることもある。 ・お願いの理由を添えると受け止めやすくなる。 ・似た意味でも強く言いすぎる言葉がある。	相手・目的・場面を示した教師作成の例を比べる。言葉を選ぶ理由を、語の難しさではなく受け取り方から説明させる。児童の家庭の言葉や方言を低く評価しない。 想定する難しさ：丁寧で長ければよいと判断する。似た語句をどの場面でも同じ意味と考える。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 相手と目的に合う語句を選び、意図が伝わるように文の書き表し方を工夫している。(相手と目的を記した文・語句の修正と理由)
まとめ (分)	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって確かめたことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・似た意味でも強く言いすぎる言葉がある。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った実際の言葉を入れる。書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って自分の表し方を確かめる。 ◎態① (学習前後の記録と、見直した理由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に題名と本時のめあて。その左に問い「同じお願いを伝えるなら、この相手にはどの言葉を選びますか。言い方を変えると、受け取り方はどう変わりますか」。中央は根拠となる言葉・本文の箇所と、そこから考えたことを上下に対応させる。根拠の本文は先生が教科書から書き入れる。中央から左に児童の考えを並べ、同じところを囲み、違いの理由を線で結ぶ。左端に、本時で確かめた実際の言葉を含むまとめと、考えを見直した理由を書く欄を置く。縦書きで右から左へ学習の順をたどれるようにする。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

